

テッポウユリの早期促成に関する試験

布宮 徹・小野 恵二・勝木 謙蔵

(山形県立園芸試験場)

Studies on Forcing Culture of Easter Lily (*Lilium longiflorum* THUNB.)

Tōru NUNOMIYA, Keiji ONO and Kenzō KATUKI

(Yamagata Horticultural Experiment Station)

1 ま え が き

テッポウユリは生育適温が高いため、寒冷地における栽培は暖房費がかさみ採算があわない。しかし10月出しの促成であれば無加温のパイプハウスを利用した栽培が可能であると考えられる。また、シンテッポウユリの端境期となり価格的にも有利である。そこで沖永良部島産の球根を用い、冷蔵日数と加温の要・不良、および栽培地の影響について検討を行った。

2 試験方法

試験1 冷蔵日数と加温の有無：冷蔵日数を6・7週とし、品種は‘ひのもと’・L球(1 $\frac{C}{S}$ 140球, 1球重180g)を供試した。各区14球を用い2区制とした。昭和53年7月1日に球根を入手し、45℃・1時間の温湯浸漬後、10℃の湿冷条件で冷蔵を行った。植付けは箱植え(30×45cm, 深さ12cm)とし、1箱当り7球を植付けた。栽培はガラス室内で行ない、夜間の保温は8月28日より開始した。加温区は10月20日以降、栽培温度を夜間最低15℃を保つように暖房した。

試験2 冷蔵日数と栽培地：冷蔵日数を6・7週、栽培地を園試(寒河江市)と現地(山形市)の2カ所とし、各区18球を用い2区制とした。品種は‘えらぶの光’・L球を供試した。昭和53年6月26日に球根を入手し処理を開始したが、温湯浸漬・冷蔵条件は試験1に準じた。植付けは1箱当り9球とし、無加温パイプハウスで栽培した。夜

間の保温は寒河江で8月28日より始め、10月2日からはトンネルを併用した。現地では9月9日より開始し、10月6日よりカーテンを使用した。

なお、試験1・2とも球根植付けより芽が5~6cmになるまで遮光率90%のダイオシートの被覆下で管理した。施肥量は1箱当り成分量でN 6g, P₂O₅ 6g, K₂O 7.2gとした。

3 結果および考察

試験1 球根の出庫・植付け時の発芽は7週間冷蔵において20%ほどみられ、6週間冷蔵では発根球のみであった。発らいはいずれも植付け後から38日後となり9月中・下旬となった。開花は6週間冷蔵区で加温の有無による影響がなく10月下旬であったが、7週間冷蔵では加温区が11月5日、無加温区で5日ほど遅れ11月10日ごろになった。到花日数は加温区で冷蔵日数にかかわらず76日程度となったが、無加温の7週間冷蔵区では栽培が気温の低い時期にずれたため82日を要した。切り花品質は6週より7週間冷蔵で加温の有無にかかわらず向上し花茎長が長く、切り花重が増大した。また花らい数についても増加の傾向にみられた。これは7週間冷蔵の植付けが8月20日となったため植付け後の気温が6週間冷蔵の場合より低く経過し、その結果花芽分化開始がおそく花茎長が長くなり、花らい数もやや増加したものと思われる。しかし6週間冷蔵でも花らい数が2・3輪と適正で、花茎長・切り花重についても実用上の問題がなく高い採花率となった(表1, 図1・2)。

表1 発らい・開花および開花期における特性

冷蔵日数 (週)	加温の有無	平均発らい日 (月・日)	植付けから発らいまでの日数 (日)	平均開花日 (月・日)	到花日数 (日)	花茎長 (cm)	葉数	切花重 (g)	花らい数	切り花率 (%)
6	有	9.19	38	10.26	75	86	53.7	117	2.8	100
6	有	9.19	38	10.26	75	86	55.2	113	2.3	100
6	無	9.20	39	10.26	75	86	52.8	124	2.4	100
6	無	9.20	39	10.26	75	72	52.4	104	2.4	100
7	有	9.27	37	11.5	76	98	47.2	156	3.1	100
7	有	9.28	38	11.6	77	106	59.6	196	4.2	100
7	無	9.28	38	11.10	81	98	58.3	157	3.2	100
7	無	9.28	38	11.12	83	89	55.6	142	2.4	100

注. 花らいの先端が割れた時を開花とした。

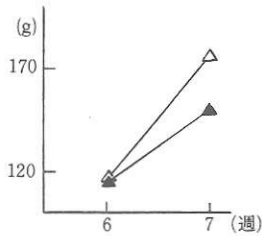
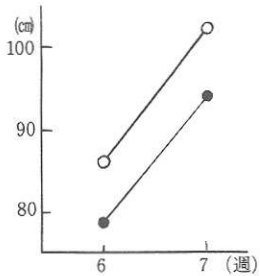


図 1 冷蔵日数と花茎長

図 2 冷蔵日数と切花重

以上のことから、7週間冷蔵で切り花品質が高まるが6週間冷蔵でも実用上の問題がないので、7月上旬の冷蔵開始で10℃の湿冷条件とした場合6～7週間の冷蔵処理後植付ければ無加温栽培で10月下旬～11月中旬の切り花が可能である。

試験 2 球根の出庫・植付け時の発芽は7週間冷蔵で40%ほど認められ、発根数は冷蔵日数による差がなかった。しかし発根長は冷蔵日数を長くしたもので伸びる傾向がみられた。植付けより発らいまでの日数は山形でわずかに遅れたが、これは保温開始期の影響によるものと思われる。寒河江における7週間冷蔵区は発らいまでの日数を短縮したが、これは冷蔵量の増加により茎軸の伸長が助長され、

花成が早まったものと考えられる。開花は7週間冷蔵の現地を除き、いずれの栽培地も10月20日ごろとなった。到花日数は各区とも70日前後となったが、寒河江に比較して現地の区で5～7日ほどの遅れとなった。この原因も保温開始期の差によるものと思われる。切り花品質は山形における6週間冷蔵区がややかわき気味となったため花茎長・切り花重を低下したがほかは大差がなかった。切り花率はいずれも高くなったが寒河江の区でガク割れをわずかに生じた(表2, 図3・4)。

以上のことから、寒河江、山形のいずれの栽培地においても6月下旬の冷蔵開始で10℃の湿冷条件とした場合、6～7週間の冷蔵処理が行われれば現地農家でも十分栽培でき、実用上の問題がなく10月下旬の開花となる。

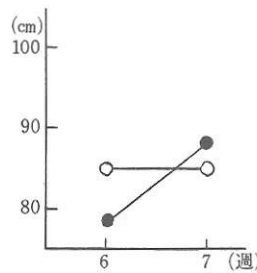


図 3 冷蔵日数と花茎長

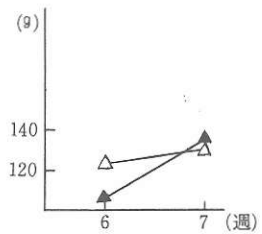


図 4 冷蔵日数と切花重

表 2 発らい・開花および開花期における特性

冷蔵日数 (週)	栽培地	平均発らい日 (月・日)	植付けから発らいまでの日数 (日)	平均開花日 (月・日)	到花日数 (日)	花茎長 (cm)	葉数	切り花重 (g)	花らい数	切り花率 (%)
6	寒河江	9.13	37	10.17	71	82	50.3	122	3.1	89
6	寒河江	9.14	38	10.17	71	88	49.7	131	3.8	89
6	山形	9.15	39	10.20	74	73	47.0	91	2.9	89
6	山形	9.16	40	10.21	75	80	49.3	94	3.0	100
7	寒河江	9.17	34	10.20	67	85	51.2	136	3.2	100
7	寒河江	9.18	35	10.21	68	84	49.2	127	3.0	89
7	山形	9.20	37	10.27	74	87	54.0	124	2.9	100
7	山形	9.22	39	10.28	75	90	51.0	147	3.9	100

4 ま と め

沖永良部島産の球根を6月下旬～7月上旬に入手し、た

だちに10℃の湿冷条件で冷蔵を行ない、植付けた後ビニルで夜間の保温をすれば10月下旬～11月中旬に切り花できる。